

専任教員教育研究業績

平成28年7月1日

| 氏名 | ふりがな | 所属学科 | 職 位 | 性別 |
|---|---|--|---------------------|--------------|
| 中山 貴太 | なかやま たかひろ | 保育学科 | 学科長 教授・准教授・講師・助教 | ♂・♀ |
| 担 当 科 目 名 | | | 学 内 委 員 会 等 (委 員 長) | |
| 【通学】「教育実習指導」「保育実習指導Ⅰ」「ボランティア」「卒業研究」 【通信】「健康・スポーツ実技」「健康・スポーツ理論」「身体表現Ⅰ」「身体表現Ⅱ」 | | | オリンピック・プロジェクト | |
| 学 歴 | | | | |
| 和暦(西暦)年 月 | 事 項 | | | 学位 |
| 平成 18 (2006) 年 4 月 | 大阪大谷大学人間社会学部人間社会学学科 入学 | | | |
| 平成 22 (2010) 年 3 月 | 大阪大谷大学人間社会学部人間社会学学科 卒業 | | | 学士(人間社会学) |
| 平成 22 (2010) 年 4 月 | 順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科 スポーツ社会科学領域 スポーツマネジメント学専門分野 博士前期課程 入学 | | | |
| 平成 24 (2012) 年 3 月 | 順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科 スポーツ社会科学領域 スポーツマネジメント学専門分野 博士前期課程 修了 | | | 修士(スポーツ健康科学) |
| 教 育 歴 ・ 職 歴 | | | | |
| 名 称 | 期 間 | 教 育 内 容 又 は 業 務 内 容 | | |
| 順天堂大学 スポーツ健康科学部 | H.23年4月～H.25年3月まで | ティーチング・アシスタント 担当科目「総合講座(前期)」、「組織開発実習」 | | |
| 医療法人誠心会 神奈川病院 | H.24年4月～H.27年3月まで | 外来治療の一環としたデイケアにおけるプログラム講師(スポーツ担当)(非常勤)。 | | |
| 医療法人清和会 浅井病院 | H.24年4月～H.27年3月まで | 精神科医療における運動療法(非常勤) | | |
| 順天堂大学スポーツ健康科学部 | H.24年5月～現在 | 非常勤助手として研究、実験の補助 | | |
| 社会福祉法人ゆりの木会 ゆりの木苑 | H.24年6月～H.27年3月まで | 特別養護老人ホームにおける運動療法(非常勤)。 | | |
| 東京未来大学子ども心理学部 | H.25年7月～現在 | 非常勤講師 担当:「子ども体育」(通信教育課程) | | |
| 東洋学園大学 | H.25年9月～現在 | 非常勤講師 担当:「スポーツ 2」「スポーツ 1(H26年～)」 「身体とウェルネス(H26年～)」 「人間のセクシュアリティ/保健学(H.27年～)」 | | |
| 所 属 学 会 等 | | | | |
| 名 称 | 活動期間 | 活動内容(役職等の活動を含む) | | |
| 人類働態学会 | H.22年4月～現在 | 会員 学会発表 | | |
| 日本スポーツ心理学会 | H.22年4月～現在 | 会員 学会発表 | | |
| 日本体育学会 | H.23年5月～現在 | 会員 学会発表 | | |
| 日本幼児体育学会 | H.28年1月～現在 | 会員 第12回大会実行員 | | |
| 社 会 活 動 等 | | | | |
| 名 称 | 活動期間 | 活 動 内 容 | | |
| 神奈川県地方創生大学連携事業「子育て世帯が住みたい魅力ある地域を創る～保育と食育を通じた地方創生～」 | H.27年9月～H.28年3月迄 | 神奈川県地方創生大学連携事業として幼稚園に通っていない2～3歳児とその親に対して音楽、造形、身体表現の面から教育支援を行った。 | | |

| 担当教科目に関する資格・免許等 | | | | |
|--|----------|--------------------------|---|--|
| 名称 | 取得年月 | 取得機関 | | |
| 健康運動実践指導者 | H.21年5月 | 健康・体力づくり事業財団(第90900882号) | | |
| 中学校教諭一種免許状 | H.22年3月 | 大阪府教育委員会(平21中一第787号) | | |
| 高等学校教諭一種免許状 | H.22年3月 | 大阪府教育委員会(平21高一第1044号) | | |
| 中学校教諭専修免許状 | H.24年3月 | 千葉県教育委員会(平23中専第62号) | | |
| 高等学校教諭専修免許状 | H.24年3月 | 千葉県教育委員会(平23高専第71号) | | |
| 日本サッカー協会公認C級コーチ(日本体育協会公認指導員) | H.24年12月 | (公財)日本サッカー協会(C000542347) | | |
| 研究実績に関する事項 | | | | |
| 代表的な著書、論文等の名称 | 単著共著の別 | 発行又は発表の年月 | 発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称 | 概要 |
| (著書) | | | | |
| (学術論文) 野球独立リーグ所属選手のセカンドキャリアに関する研究 一キャリア成熟度と職業レディネス概念を援用して一 | 単著 | 2012年3月 | 2011年度順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科修士論文 | 著者：中山貴太 本研究では、四国アイランドリーグPlusに所属する現役選手に対してセカンドキャリアに対する心理不安を、インタビュー調査を基にキャリア成熟と職業レディネスの観点から展開した。結果、1. 高校卒業選手の方が大学卒業、専門学校卒業選手よりも不安は少ないが、キャリア成熟度、職業レディネスが共に低いことが示された。2. 引退後に対する不安を感じている選手ほどキャリア成熟度や職業レディネスが高い傾向が示された。3. 選手の年齢や所属年数は心理不安に対して影響を及ぼしているものの、キャリア成熟度や職業レディネスとの関連は選手の語りからは確認されなかった。 |
| (その他：学会発表) 1.日本におけるチーム効力感尺度開発の試みー大学スポーツチームを対象にー | 共著 | 2010年11月 | 人類労働学会東日本地方会「人類労働学会会報」第93号、10-11頁 | 共著者：芳地泰幸、中山貴太、山田泰行、水野基樹 本研究では、米国で開発された Collective Efficacy Questionnaire for Sports (CEQS) を翻訳し、日本の大学生スポーツチームにおけるチーム効力感の開発を試みた。その結果、一連の手続きを踏襲し、日本におけるチーム効力感尺度が開発された。 |
| 2.日本の大学生スポーツチームにおける CEQS の有効性に関する研究 | 共著 | 2010年11月 | 日本スポーツ心理学会「日本スポーツ心理学会第37回大会研究発表抄録集」114-115頁 | 共著者：芳地泰幸、中山貴太、山田泰行、水野基樹 本研究では、欧米で開発された Collective Efficacy Questionnaire for Sports(CEQS)を日本語に翻訳し、翻訳された尺度が日本人大学生スポーツチームの目標達成に向けた動機づけの指標となりえるのかを、結果期待の視点から検討した。その結果、翻訳された CEQS は目標達成にむけた結果期待を十分にとらえており、日本の大学生スポーツチームにおける目標達成に向けた動機づけの指標となり得る可能性が示された。 |
| 3.チームビルディングの実践とその効果の検討ー大学生スポーツチームを対象にー | 共著 | 2011年6月 | 人類労働学会全国大会「人類労働学会会報」第94号、57-60頁 | 共著者：芳地泰幸、中山貴太、水野基樹、北村薫 本研究では、首都圏の大学に所属する大学生スポーツチーム2チームを対象に2日間のチームビルディング(TB)を実施し、その効果をTB実施直後におこなった自由記述式アンケートに基づき検討した。その結果、TBを実施することでチームが活性化すること、TBの効果は少なくとも3つの段階および5つの側面の2軸から捉える事が出来る事が示された。 |
| 4.大学生スポーツチームにおける集団効力感と文脈的パフォーマンスの関連 | 共著 | 2011年9月 | 産業・組織心理学会「第27回大会発表論文集」151-154頁 | 共著者：芳地泰幸、水野基樹、中山貴太、北村薫 本研究では、首都圏及び関西圏の大学スポーツチーム(14チーム)を対象に集団効力感と文脈的パフォーマンスの関連を検討した。その結果、文脈的パフォーマンスと集団効力感には有意な正の相関関係が存在することが確認された。さらに、文脈的パフォーマンスの実行レベルは集団効力感に直接 |

| | | | | |
|---|----|----------|---------------------------------|---|
| 5.選手が抱く指導者に対する信頼の要因について | 共著 | 2011年9月 | 日本体育学会「日本体育学会第62回大会予稿集」101頁 | <p>的な正の影響を与える事が明らかになった。</p> <p>共著者：中山貴太、芳地泰幸、水野基樹</p> <p>本研究では選手が抱く指導者への信頼に着目し、その要因を構造化した。その結果、信頼につながる要因として「経験」や「人間性」など11の要因が、非信頼につながる要因として「専門知識の欠如」、「一貫性のない指導」など7要因が抽出された。さらに本研究の特出すべき点は、指導者は信頼するものだという盲目的に信頼する選手が存在することが確認できた点である。これは、多くの権限が指導者に集中している結果であると考えられる。</p> |
| 6.チームビルディングの実践とチーム活性化に関する研究—大学生野球部を事例に— | 共著 | 2011年10月 | 日本体育学会「日本体育学会第62回大会予稿集」103頁 | <p>共著者：芳地泰幸、水野基樹、中山貴太、北村薫</p> <p>本研究では、大学生野球部を対象に2日間のチームビルディング(TB)を実施し、その効果をチーム活性化の視点から検討した。その結果、TBを通じて大学生野球部が活性化すること、3か月後には若干低下するが、再度TB(フォローアップ研修)を実施すると再び向上することが確認できた。以上から、TBの継続的実施が重要であるという実践的知見が得られただけでなく、縦断的な検証の必要性も明らかになった。</p> |
| 7.チームビルディングの実践が集団効力感およびチーム活性化に及ぼす効果に関する研究—大学生野球部を事例に— | 共著 | 2011年10月 | 日本スポーツ心理学会「第38回大会研究発表抄録集」48-49頁 | <p>共著者：芳地泰幸、水野基樹、中山貴太、北村薫</p> <p>本研究では、首都圏の大学に所属する大学生運動部うち野球部を本研究の調査対象に、2011年1月から9月まで約8か月間、横断的な調査を実施した。その結果、TBを通じて大学生野球部が活性化すること、3か月後以降には活性化は若干低下するが、再度TB(フォローアップ研修)を実施すると再び向上することが明らかになった。また、近年注目されている、集団効力感が2日間のTBのトレーニングによって向上する可能性が示唆されたことは大きな発見と考えられる。</p> |
| 8.大学生のアルバイト従事がもたらす葛藤と恩恵—多重役割マップの特徴から— | 共著 | 2011年11月 | 人類労働学会東日本地方会「人類労働学会会報」第95号、15頁 | <p>共著者：山田泰行、芳地泰幸、中山貴太、榎原毅、広沢正孝、水野基樹</p> <p>本研究では、多重役割マップを用いてアルバイトに従事する大学生を対象に、彼らが担う様々な役割間の関係明らかにした。その結果、アルバイトは大学、人間関係、家庭といった役割にネガティブな影響(NSP)を及ぼす一方、人間関係と家庭にポジティブな影響(PSP)も及ぼしている事が明らかになった。つまり、現代の大学生にとってアルバイトに従事することは、様々な葛藤と恩恵を伴うものであるということが明らかになった。</p> |
| 9.大学生スポーツチームにおけるチームビルディングの導入とその効果の検討Ⅰ—内省報告を分析対象とした定性的調査の視点から— | 共著 | 2012年8月 | 日本体育学会『日本体育学会第36回大会予稿集』113頁 | <p>共著者：水野基樹、芳地泰幸、中山貴太、藤井啓嗣、山田泰行</p> <p>本研究は、効果的なチームづくりやチーム変革の一環として多くの組織に導入されているチームビルディング(以下、TB)に注目し、TB導入がもたらす効果を得られた内省報告(質的データ)から明らかにすることを目的とした。その結果、以下の結論を得た。1. TBの導入は、TBを体験した参加者に様々な効果をもたらす。2. それらの効果の背景には、TBプログラムを通じ、参加者間で互いに自己開示と傾聴を繰り返すことによる、多くの気づきと、新たな発見がある。3. TBの効果は大きく「自分自身に関すること」、「他者との関係に関すること」、「所属組織(チーム)に関すること」の大きく三つの側面から捉えられる。</p> |
| 10.大学生スポーツチームにおけるチームビルディングの導入とその効果の検討Ⅱ—構造化を目指した定量 | 共著 | 2012年8月 | 日本体育学会『日本体育学会第36回大会予稿集』120頁 | <p>共著者：芳地泰幸、水野基樹、山田泰行、中山貴太、藤井啓嗣、北村薫</p> <p>本研究は、大学生スポーツチームへのチームビルディング(以下TB)の導入がもたらす効果を定量的調査から明らかにし、その効果の構造化を目指したものである。その結果、1. 大学生スポーツチームにTBを導入することで少なくとも選</p> |

| | | | | |
|--|----|---------|-----------------------------|---|
| 的調査の視点から ー | | | | 手の自己理解、他者理解、さらには組織理解の促進・向上がもたらされる。2. TB を通して認められた効果のうち自己理解および、他者理解の側面はそれぞれ二つの要因から、さらに組織理解の側面は三つの要因から理解することができる。3. 各側面における効果の各要因は同時に体験される（生起する）傾向にある。以上の結論を得た。 |
| 11.首都圏における自転車利用の実態把握Ⅰー自転車利用時の行動特性と意識に関する質問紙調査からのアプローチ | 共著 | 2013年6月 | 人類労働学会会報第98号21-22頁 | 共著者：川田裕次郎、藤井啓嗣、 <u>中山貴太</u> 、芳地泰幸、水野基樹 本研究は自転車利用者における利用時の行動特性と意識に関する基礎データを得ることを目的とした。結果、1. 自転車利用時の行動特性と意識には、少なくとも4つの因子（種類）が存在すること。2. 自転車利用時の行動特性と意識は、男女別に見ると、男性の方が女性よりも不良であること。3. 自転車利用時の行動特性と意識は、年齢との関連性を見ると、年齢の低い者ほど不良であること。4. 自転車利用時の行動特性と意識は、職業別に見ると、「学生」が「主婦」よりも不良であること。5. 自転車利用時の行動特性と意識は、運転免許の有無別に見ると、関連性が示されないこと。以上が確認された。 |
| 12.首都圏における自転車利用の実態把握Ⅱー事故およびヒヤリ・ハット体験レポートからのアプローチ | 共著 | 2013年6月 | 人類労働学会会報第98号23-24頁 | 共著者：芳地泰幸、藤井啓嗣、 <u>中山貴太</u> 、川田裕次郎、水野基樹 本研究は千葉県における自転車利用の実態を把握することを目的とした。事故およびヒヤリ・ハット体験レポートから体験場所として最も多いのは「交差点」であった。相手として最も多いのは「車」であり、それらの要因として最も多いのは「飛び出し・一時不停止」であった。 |
| 13.フィットネスクラブ従業員のレジリエンス向上のための組織的支援 | 共著 | 2013年6月 | 人類労働学会会報第98号43-44頁 | 共著者：庄司直人、藤井啓嗣、森口博充、 <u>中山貴太</u> 、芳地泰幸、水野基樹 本研究はフィットネスクラブ従業員のレジリエンス向上のプロセスを質的データをもとに解明することを目的とした。結果、レジリエンス向上のプロセスを構成する要素として、「組織的サポート戦略」、「レジリエンスに寄与する個人資源」、「困難、失敗に起因するポジティブ作用」、「困難による弊害、成功体験、考え方の変化」、「レジリエンスに寄与する望ましい心理状態」、の8項目に分類された。 |
| 14.国内の主要学会における自転車研究の研究動向の把握 | 共著 | 2013年6月 | 人類労働学会会報第98号58頁 | 共著者： <u>中山貴太</u> 、芳地泰幸、藤井啓嗣、川田裕次郎、水野基樹 本研究は日本人間工学会、日本交通心理学会、人類労働学会において自転車研究がどのように展開されてきたのか調査した。結果、過去50年間で自転車に関する研究が計49編確認され、「身体的側面に焦点をあてた研究」、「工学的側面に焦点をあてた研究」、「心理的側面に焦点をあてた研究」に分類された。 |
| 15.体育系大学におけるAO・推薦入学予定者を対象とした入学前教育の導入効果Ⅰープログラム体験後の心理的変容の視点からー | 共著 | 2013年8月 | 日本体育学会『日本体育学会第64回大会予稿集』122頁 | 共著者：水野基樹、芳地泰幸、 <u>中山貴太</u> 、北村茉衣、野川春夫 体育系大学におけるAO・推薦入学予定者を対象に2012年と2013年に導入された入学前教育プログラムの効果を導入前後の心理的変容の視点から検証し、効果的な入学前教育プログラムの展開に向けた資料を得ることを目的とした。その結果、プログラムを体験した学生の多くに「自己理解」、「他者理解」、「学校理解」の高揚が確認され、「ふりかえりレポート」からは、「入学後への期待」、「卒業後のビジョンの明確化（再確認）」、「仲間づくり」に関する記述が数多く確認された |
| 16.体育系大学におけるAO・推薦入学予定者を対象 | 共著 | 2013年8月 | 日本体育学会『日本体育学会第64回大会予稿集』137頁 | 共著者：芳地泰幸、水野基樹、 <u>中山貴太</u> 、藤井啓嗣、野川春夫 本研究では、体育系大学におけるAO・推薦入学予定者を |

| | | | | |
|---|-----------|-----------------|---|---|
| <p>とした入学前教育の導入効果Ⅱープログラムを体験した学生の入学後の追跡調査の視点からー</p> | | | | <p>対象に2012年および2013年に導入された入学前教育プログラムを体験した学生の入学後の実態を把握することで、入学前教育の効果と、今後の入学前教育プログラムの展開に向けた資料を得ることを目指したものである。そのため本研究では、「成績調査」、「授業態度の観察」、「インタビュー調査」の3つの調査から学生の実態把握に努めた。3つの調査結果を統合すると入学前教育の導入には一定の効果がある傾向が示された。</p> |
| <p>17.フィットネスクラブ従業員におけるスポーツ経験がレジリエンスに影響を及ぼすプロセスに関する研究</p> | <p>共著</p> | <p>2013年8月</p> | <p>日本体育学会『日本体育学会第64回大会予稿集』135頁</p> | <p>共著者：庄司直人、芳地泰幸、<u>中山貴太</u>、藤井啓嗣、水野基樹 本研究では、首都圏のフィットネスクラブで勤務する従業員26名を対象に、過去から現在にわたるスポーツ実施経験が、レジリエンスの獲得・向上に影響を与えるプロセスをインタビュー調査から明らかにした。その結果、スポーツでの経験が、思考様式や認知の変化に影響を与え、そして、レジリエンスの獲得・向上につながる事が示された。</p> |
| <p>18.対「自転車」における事故及びヒヤリ・ハットの实態把握</p> | <p>共著</p> | <p>2013年11月</p> | <p>『人類動態学会会報』第99号、7-8頁</p> | <p>共著者：中山貴太、庄司直人、芳地泰幸、藤井啓嗣、川田裕次郎、水野基樹 日本の政令指定都市（千葉市、横浜市、相模原市、さいたま市、大阪市）において対自転車における事故およびヒヤリ・ハット体験に関する実態を明らかにするために街頭調査を実施した。その結果、交通構成員が対「自転車」に対して事故及びヒヤリ・ハットを経験する状況は、自転車運転者のスマートフォンや音楽再生機器の使用等の「電子機器の使用時」、「右側走行時」、「スピード超過時」である。そして、それらは「歩道」、「交差点」、「狭い道」、「坂道」において発生する傾向があることが明らかにされた。</p> |
| <p>19.自転車運転者の不安全行動を引き起こす心理的要因に関する研究ー政令指定都市の事故およびヒヤリ・ハットレポートからのアプローチー</p> | <p>共著</p> | <p>2013年11月</p> | <p>『人類動態学会会報』第99号、9-10頁</p> | <p>共著者：庄司直人、<u>中山貴太</u>、芳地泰幸、藤井啓嗣、川田裕次郎、水野基樹、北村薫 政令指定都市（千葉市、横浜市、相模原市、さいたま市、浜松市、大阪市）に在住の189名（男性118名、女性71名、平均年齢=39.69歳）を対象に危険を予見しながらも事故やヒヤリ・ハットに至ったと運転者が認知する事例を用いて、不安全行動に至る心理的要因を検証した。その結果、不安全行動が誘発されやすいと推測される環境は、①時間的切迫とリスク受容量の増大やリスクの過小評価が重なる時、②目的地到着直前や通勤経路など慣れ親しんだ場所で慢心に近い感覚に陥ったとき、③交通他者と交錯する場所で、交通他者の動向を決めつけたとき、であることが明らかになった。</p> |
| <p>20.A Study on the Effects of Team Building for University Baseball Team in Japan : Focused on Morale and Belief in Cooperation</p> | <p>共著</p> | <p>2014年8月</p> | <p>The 7th Asian-South Pacific Association of Sport Psychology International Congress in Tokyo, CD-ROM The 7th Asian-South Pacific Association of Sport Psychology International Congress (ASPASP_2014) 於:National Olympics Memorial Youth Center (NYC), Tokyo, JAPAN</p> | <p>共著者：Yasuyuki Hochi, Motoki Mizuno, <u>Takahiro Nakayama</u>, Mai Kitamura, Riyako Honda, Kaoru Kitamura The purpose of this study was to examine the effects of the experience of TB among university baseball team from the view point of Morale and Belief in Cooperation. We carried out TB designed by Kitamori (2008) to one university baseball team (69 players) in 2013. The average age of the 69 participants was 20.15 years (SD=.87). We use Scale to Measure Belief in Cooperation (Nagahama, et al. 2009) and Morale (Tsuruyama, 2011) to examine the effects of TB. The answers of this investigation were collected from the participants before and immediately after the intervention of TB. The paired t-test showed that the score of moral of university baseball team was higher than before TB experience ($t=2.56, p<.05$). The practical implication of these findings suggested that implementation of TB is effective from the viewpoint of morale.</p> |

| | | | | |
|---|-----------|-----------------|--|--|
| <p>(その他：雑誌記事)</p> <p>21. 人類労働学会 第46回全国大会におけるワークショップの報告 (シンポジウム「労働学会らしい生活の見直しから考える自転車の新しい役割～若手研究者育成支援による科研費申請のためのロードマップの一環として～」)</p> | <p>共著</p> | <p>2011年11月</p> | <p>人類労働学会東日本地方会「人類労働学会会報」第95号、39頁「第1班：子育て時の交通手段(三人乗り、転落事故)」を担当</p> | <p>共著者：中山貴太、水澤隆、本田勇輝、稲葉健太郎、川田裕次郎、芳地泰幸、菅又雄太郎、庄司直人</p> <p>「第1班：子育て時の交通手段(三人乗り、転落事故)」のグループワークでの議論やプレゼンテーションを振り返り、まとめたレポート</p> |
| <p>その他 (表彰等)</p> | | | | |